

# 京町家の境

## - 尚徳校以前の姿 -

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



調査地と周辺の町並み (上が北)

2005年に実施した尚徳中学校跡地の調査では、江戸時代の遺構を良好な状態で検出することができました。尚徳中学校は明治2年(1869)に尚徳校として開校したのが最初です。それ以前は町家であり、その頃の様子を明治9年(1876)に作成された地籍図から復原することができました。

では、どのようにして町家の範囲が推定できたのでしょうか。地籍図には敷地の規模と範囲が数値(間尺寸)で記載されています。その数値をメートルに換算して復

原図を作成し、現場の図面と重ねると、地籍図にある情報が現地で判断できるようになります。

このような作業から、何がわかるのでしょうか。まず、町屋境と思われる箇所には石垣や礎石が並んでいました。また、そうした遺構がない所でも、土壌(ゴミ処理用に掘られた穴)のない平らな面が続いていました。

地籍図ができた明治9年当時、すでに尚徳校は開校しており、「小学校地所」となっていました。当時の学校用地は現在より狭く、

裏の写真のように、町屋境の遺構から、町家が1から7まで並んでいたとわかりました。

尚徳中学校周辺の町家は、北側の楊梅通(平安京の楊梅小路より北に約20m移動しています)と南側の鍵屋町通(平安京にはなかった通りです)に面して建てられています。このため、調査地の中央付近に「背割り」(町家が背中合わせになること)となります。調査地では、この場所に石垣や礎石列、漆喰の壁が東西に並んでいました。



写真1 江戸時代後期の背割りの石垣（東から）



写真2 江戸時代後期の石敷路地（北から）

石垣は、町家境としては最も一般的な施設であり、町家5・7・12などで見られました（写真1）。平らな面を外に向けて積んでいます。礎石列の部分には板塀や柵があったのでしょう。漆喰は、土塀の基礎部分に利用されていた漆喰壁の残りと思われる。珍しい遺構として石敷があります。これは河原石を狭い幅で敷き詰めたもので、町家2・3の境にみられました（写真2）。町家間を出入りするための路地であったと思われる。ここを通過して裏口に回り込み、

便所のかみ取りや菜畑へ出入りしたのでしょう。

境界となる遺構がない箇所では、土塀の端が並ぶ点が注目されます。この時代には敷地内に穴を掘ってゴミを処分していたため、穴が連続する箇所の方に敷地境があったと推定できました。

このように、町家境の施設には様々なものがみられました。これはそれぞれの家で管理していたためといえます。

現在の町屋境を見ると、境界の大半はブロック塀となっています

が、石垣や板塀、生垣などもまだ残されています。

京都の町家は、間口が狭く奥行きがあるため、「鰻の寝床」と呼ばれます。入口は土間であり、それが奥へと続きます。片方には母屋があり、先に進むと、炊事場には竈（かまど）やおくどさんや流しが置かれました。井戸や水溜り用の枧（ます）便所（埋糞）なども町家内部の様子を知る大切な遺構です。

境界を示す遺構は、京町家の規模と範囲を推定する重要な手がかりといえるでしょう。（丸川義広）



江戸時代中期（18世紀）の調査地の姿  
調査成果と地籍図から町家境を朱線で示した。町屋1～7は明治2年に学校用地となったところ。